

佳作

二重跳び

埼玉県 川口市立高等学校附属中学校三年 石田 陽菜

「五年三組石田さん、二回。はい、次の人。」

小学校の小さな体育館に、先生の太い声が響いた。いろんな生徒が見ている前で、苦手な二重跳びをさせられるだけで十分恥ずかしいのに、大きな声で記録を読み上げられた私は一瞬で顔が真っ赤になった。

その翌年も、実技テストが近づいてきた。結局六年生になっても二重跳びはできないまま。お知らせプリントをひらひらさせながら、もういっそ開き直ろうかと考えた時、声をかけてくれたのが英ちゃんだった。英ちゃんは、私が縄跳びが苦手なことを知っていてもからかったり笑ったりしない優しい子。「一緒に練習しない？」と言って、放課後毎日校庭に誘ってくれた。運動神経がいい英ちゃんは、跳びながらなのにすらすらコツを話し出す。縄の回し方、タイミング、足の動かし方を、何度も何度も、根気強く教えてくれた。私は、最初こそ真面目に跳んで

いたものの、うまくできないのがだんだん恥ずかしくなると、失敗する度に泣きたい気持ちで殺してヘラヘラ笑ってごまかすようになっていた。

練習を始めてから数週間が経ったとき、苦戦する私の様子を見ていた英ちゃんが、突然跳ぶのをぱたりとやめてぼろぼろと泣き出した。あまりにもびっくりして、

「どうしたの？」

と聞いた。私の練習につきっきりでいることが嫌になったのか。それとも、何か悩んでいるのか。いろんな考えが頭をよぎった。でも、どれも違った。英ちゃんは涙をぬぐって言った。

「陽菜にちゃんと上手に教えてあげられなくて悔しい。せっかく頑張っているのに、ごめん。」

その言葉を聞いた瞬間、胸がぎゅっとなった。私は、ただ苦手な縄跳びを教えてもらっているだけだと思っていた。でも英ちゃんは、私のために本気で向き合ってくれていた。私がうまくできないことを、自分のことのように悔しがってくれていた。その優しさと真剣さに、心がじんわり温かくなり、私もなぜか泣いた。それから私は少しずつ縄跳び練習と向き合うようになった。うまくできなくても、練習にたくさん付き合ってくれる英ちゃんの気持ちに応え

たいと思った。努力することの意味を初めてちゃんと考えた気がした。

今でも、あの時の英ちゃんの言葉をときどき思い出す。家族や友達が自分のために本気になってくれる有難さ、人の気持ちに触れる大切さ、あの経験が、今も心に残り続けている。あれから三年も経ったけれど、何かに挑戦する時、ふと英ちゃんの顔が浮かぶ。もし失敗しても、誰かが応援してくれていると思えば、以前より苦手と向き合えるようになった。英ちゃんは、「できるよようになること」よりずっと大切なものに気づかせてくれた。